

## 【資 料】

# 老年看護学実習における学生の気づきを引き出す指導に関する一考察 —学生が気づいた生活史を通して高齢者を尊重するということ—

藤谷未来\*

## 【要 旨】

老年看護学実習の記録を基に、学生が高齢者を尊重するケアに至った過程を整理・分析し、教員の指導と共に検討した。学生達は高齢者に合った関わり方に苦慮していたが、関わりの中で、高齢者の性格や役割、思いを知り、高齢者には長い生活史があることを実感していた。こういった生活史を踏まえ、高齢者が学生に作り方を教える「でんぷんがき」作りをレクリエーションで実施したところ、高齢者の誇らしげな様子がみられたことから、学生は「患者の大切なことを守ることは、患者を尊重した関わりにつながるのではないか」と考えていた。「でんぷんがき」作りを通して学生は、高齢者が長い人生の中で大切にしてきたものに着目し看護していくことで、その方のニーズに応じた個別性のある看護が提供でき、高齢者を尊重する事に繋がると理解していた。これらのことから、高齢者の生活背景や役割などに学生が気づけるよう指導していく必要性が示唆された。

【キーワード】 高齢者、尊重、生活史、老年看護学実習

## I. はじめに

わが国では高齢化が問題となっており、看護学教育においても老年看護学の重要性が益々高まっていると考えられる。研究者が所属する教育機関における老年看護学実習の目的は、「健康障害を有する高齢者とその家族を理解し、適切な看護を実施するための基礎的能力を修得する」である。実習目標の1つには、「健康障害を有する高齢者の全体像を理解できる」といった目標があり、この目標の小項目として、「受け持ち高齢者の生活史や大切にしていることを述べるができる」、「高齢者を尊重した態度で看護を実施できる」といった目標もある。

研究者が老年看護学実習の指導を行う中で、看護学生は高齢者を尊重することや自尊心を大切にしたケアが重要であることは理解し、記録上のキーワードとして「尊重」や「自尊心」という言葉を用いることはあるが、どのようなケアを行うと高齢者を尊重したことになるのか、自尊心を大切にすることはどのようなものかについてまで考察が至らない学

生がいることに気付いた。また、単に敬語を使うこと、礼儀を持って丁寧に接するだけのことを、高齢者を尊重した態度と認識しているのではないかと疑問をもった。

鎌田（2000）は、高齢者は長い“時間の蓄積”をもった人であり、加齢による時間の蓄積は、体に衰えをもたらすが、誰にも超えることのできない長い人生を生き抜いてきた誇りと自信を与えてくれるものであると述べている。このことから、長い“時間の蓄積”の中で、高齢者一人一人が何を大切にしてきたか、どこに価値を見いだしてきたかを知ることによって高齢者の自尊心やその人らしさを大切にすると考える。しかし、佐藤（2014）の報告から、成人看護学実習及び老年看護学実習の実習前後の学生の自己評価では「価値・信念パターン」「自己知覚・自己概念パターン」「役割・関係パターン」の情報解釈は他の項目より自己評価の平均点が低いことが明らかになっており、さらに、学生は高齢者の問題状況にとらわれ、社会生活などの全体像に目を向ける事が困難であるという意見もある（福田、

\* 日本赤十字北海道看護大学

2011)。

これらの報告から、看護学生は高齢者の価値観や信念を理解することに難しさを感じていることがうかがえるが、学生が老年看護学実習においてどのように高齢者を尊重したケアを考え、実施しているのかという研究はみられなかった。

竹田(2010)は、「高齢者の健康は、日常生活を営む上で必要とされる生活機能の自立に注目した、多面的、包括的な概念であるといえる。さらに、社会文化的背景に影響され、その人の価値や信念と深くかかわる概念であるスピリチュアルな側面の健康も重要な視点である。」(p49)と述べている。高齢者の健康を支えるためには、一人一人の価値や信念を知る必要があり、そのためには、それらがどのような背景で培われてきたのかを知る必要があり、高齢者の生きてきた時代背景や文化的背景、生活史などを知ることが重要であると言える。

これらのことから、本研究では老年看護学実習において、学生が高齢者と関わる中で把握した生活史から、どのように高齢者の価値や役割を見だし、高齢者を尊重するケアを考えたのか、その過程を整理・分析し、教員の指導とともに検討することを目的とした。

本研究の意義は、学生の関わりや思考の過程、教員の指導を振り返ることで、学生が高齢者を尊重するための指導に示唆を得ることができることである。

## II. 研究目的

老年看護学実習で、学生が高齢者と関わる中で得た生活史から、どのように高齢者を尊重するケアを考えていったのかを教員の指導とともに整理し検討する。

## III. 研究方法

### 1) 研究デザイン

事例研究

### 2) 研究協力者

4年生大学の看護学科の4年生で、老年看護学実習で担当した1つのグループ学生9名のうち、同意を得られた7名を研究協力者とし、研究目的について詳細に記録していた3名(以下、学生A、B、Cと表記した)のデータを主に使用した。カンファレンスの記録は、同意の得られなかった学

生を除いた7名の発言・記録を取り上げた。研究者が担当したグループはいくつかあるが、このグループを選定した理由は、グループ内の数名の学生が受け持ち患者と関わる中で、生活史を知り、それらを尊重し高齢者の役割を考える学生がいたためである。またそれらをグループ内で共有し、グループ全体で高齢者を尊重したケアを考え実践したグループであったため研究協力者として選定した。

### 3) データ収集方法

データは、単位を修得した学生の実習記録、教員の指導記録、カンファレンスの記録をデータとした。

教員の指導記録とは、教員である研究者が実習指導の際に学生に指導した内容と参加観察によって把握した学生の様子について記述した内容を指す。なお、データ収集期間は、平成30年3月とした。

### 4) 分析方法

データから、学生が患者との関わりで患者の生活史に気づいた場面や学生が自尊心について学んだと記述されている場面を取り上げ、把握した生活史からどのように高齢者を尊重するケアを考えたか、教員の指導とともに検討した。

## IV. 倫理的配慮

研究協力者には、口頭および研究依頼書で、研究の目的、研究協力に対する自由意思、協力が得られない際の不利益は生じないこと、個人が特定されないように十分配慮すること、研究参加は自由であることを説明した。

教員と学生間といった関係性を考慮し、同意書の回収には回収箱を用いた。また、実習記録等のデータには、受け持ち患者についての記載があるため、実習病院の院長と看護部長にも研究依頼書で、研究の概要等を説明し、実習記録等をデータとして使用することについて、書面による同意を得た。

得られたデータは、研究以外の目的では使用せず、コード化して協力施設及び研究対象者が特定されないように十分に配慮し、データは研究代表者の研究室で、鍵のかかる場所に保管すること、研究結果は学内の論文投稿等で公表する場合があることについても口頭・文書で説明した。なお、本研究は、日本赤十字北海道看護大学研究倫理委員会(承

認番号29-289)の承認を得ている。

## V. 実習概要

3年次後期から4年次前期に、135時間・3単位の病棟実習を行う。実習目的を「健康障害を有する高齢者とその家族を理解し、適切な看護を実施するための基礎的能力を習得する」とし、実習目標に以下の4つを掲げている。

- ① 健康障害を有する高齢者の全体像を理解できる
- ② 必要な看護を立案し、実施、評価できる
- ③ 受け持ち高齢者にかかわるサポートシステムを理解できる
- ④ 他職種との連携の実際を知る

また、毎日カンファレンスを設け、学生の決めたテーマについて話し合うこと、学生の受け持ち患者を対象としたレクリエーションを学生全員で企画・実施することを課している。レクリエーションの企画・実施は、高齢者の療養生活上の変化をもたらす目的や集団の中で発揮される個々の力を引き出す目的で行っており、学生自身で企画・実施することで、受け持ち患者を中心とした、療養生活を送る高齢者の理解が深まることをねらいとしている。

## VI. 学生の概要

老年看護学実習Ⅱ4クール目の学生で、領域別実習のほとんどを修得しており、未修得の実習科目は当該実習と成人看護学Ⅰのみであった。

## VII. 学生の受け持ち患者の概要

学生Aの受け持ち患者は80代女性であった。狭心症と身体表現性障害が主疾患で、めまいや頭痛を訴えることが多い患者である。夫や妹などの近い親族との死別を多く体験しており、今後の独居生活

に不安を感じ、施設入所を検討しているが、慣れ親しんだ土地から離れたくないと語っていた。

学生Bの受け持ち患者は60代女性で、夫と長男と共に酪農を営む方であった。学生が受け持つ4年前にパーキンソン病と診断され、自宅療養をしていたが、実習の3ヶ月前に一般病棟に入院となった。入院の2ヶ月後に療養病棟に転棟し、治療とリハビリ、退院後のサービス調整をしていた。症状は、小刻み歩行や振戦の他、認知症もあり、意欲低下や幻聴・幻覚もみられた。これらの症状から、日常生活動作に常時見守りと介助が必要な状態であった。コミュニケーション能力は、問いかけに対して異なる答えが返ってくるなど意思疎通が困難なことが多かった。

学生Cの受け持ち患者は90代男性であった。戦時中は軍隊、戦後は屯田兵として従事していた。脊柱管狭窄症と前立腺肥大による尿閉があり、学生が受け持つ1年前に入院。膀胱留置カテーテルを挿入し保存治療となった。下肢の痺れが主訴で歩行器を使用しているが、その他の日常生活は自立していた。独居であり、退院後の独居継続が難しいことからサービスの調整中であった。コミュニケーションは良好で、「人に頼りたくない」「もたもたされると腹が立つ」といった性格の方であった。

## VIII. 結果

### 1. 学生の学習経過

1) 患者との関わりに苦慮した場面【実習1～3日目】

1日目は、午前中に実習施設のオリエンテーションが実施され、午後から受け持ち患者とのコミュニケーションやカルテからの情報収集を行った。2日目以降は看護過程の展開をしていった。

学生Bの受け持ち患者はパーキンソン病と認知症の診断を受けており、幻視があることで、食事中集中できない場面があったり、日中に寝ている場面

表1

学生	受け持ち患者	患者情報				要介護度
		年齢	性別	疾患名		
学生A	患者A	80代	女	狭心症、心房細動、身体表現性障害	要支援2	
学生B	患者B	60代	女	パーキンソン病、認知症	要介護2	
学生C	患者C	90代	男	脊柱管狭窄小、前立腺肥大	要支援2	

が多かったりと、学生は関わりに苦慮していた。そこで教員は、この時間に寝てしまう原因はあるのか、入院前の生活はどうだったかを考えるように促した。学生は、患者が夜間は眠れていることを確認し、入院前は酪農業を営んでいたことに着目し、一般的な酪農家の生活パターンを調べた。翌日学生は、「先生、酪農家の一日を調べるとわかったことがありました。」と嬉々として報告をしてきた。3日目の振り返りには（以下、記録物からの情報は斜体で示す）、A氏はもともと酪農家であり、仕事を朝早くから行っていた。酪農家の生活を調べると、4～5時ころから起床し牛の世話や搾乳を行い、朝の仕事を終えた後8時頃に朝食や休憩をとり、また夕方の搾乳までの間に休憩をとるような生活リズムであった。現在のA氏の休息の時間帯も、朝食後（8時半～9時半頃）、昼食後（1時～2時頃）に休息をとっているため、その当時のリズムと似ているように感じた。と記載していた。

学生Cは、実習2日目に足浴を行おうとしたが、必要性の説明や方法の説明などが丁寧で、時間がかかったため、「やるならさっさとやれ。」と患者に一喝され、萎縮していた。学生が、石鹸を使用しても良いかの確認や、その必要性を丁寧に説明すると「要らん！」と拒否されたため、教員が手技を変わり、折を見て石鹸の必要性を簡潔に伝えると「おう。」と納得された。丁寧な態度とは真逆な教員のざっくばらんな関わり方を見て学生Cは落ち込んだ様子を見せ、「患者さんと先生は気が合うから良いですよ。私にはなかなかできません。」と言ってきた。これを受け、「気が合う、合わないではなく、合わせる事が大事。患者さんが何を求めているか考えながら話をしていくこと。」と助言した（教員のメモより）。この日の学生Cの振り返りは、足浴時に石鹸を使用することに対して抵抗があり、拒否する様子が見られたが、先生が再度「水虫よくするために、石鹸できれいにしようね。」などと促すと、石鹸で行うことができている。上手くA氏に説明することができず、先生が実施する形になってしまった。また、先生と3人でコミュニケーションを取っていると、A氏は「俺は丁寧すぎると疲れる。もっと一方的に行っていいんだ。」などの発言が見られた。実際、何か援助を行う際必ず、提案や許可を求める形で行っていたため、A氏に負担をかけていたと考える。と振り返っていた。

## 2) 患者のこれまでの生活史を重んじたレクリエーションの企画【実習3日目】

実習3日目の午後は、レクリエーションについて話し合う時間が設けられており、学生全員で、レクリエーションの企画立案を行った。教員は、「まず、自分たちの患者さんの状況について皆で共有すること。患者さんができること、患者さんが望んでいることを常に意識して話合いをするように。」と助言した。その後、学生は患者の疾患、ADLの状況、認知症の程度、患者の好きなこと・できそうなことを共有した。

受け持ち患者と3日間関わることで得た患者の情報で学生達が考えた、患者に共通することは、以下のような内容であった。

- ・食べることを楽しみにしている。
- ・女性には家事や子育ての役割があった。
- ・昔の話をよくしてくれる。
- ・社会交流の機会が減っている。
- ・死ぬまでこの町で暮らしたいと思っている。

これらの受け持ち患者の特徴から、教員は「社会交流の機会が減っている高齢者にとって学生が付き、昔の話をすることはどのような意味を持つか」「事前学習で、高齢者の身体的・心理的・社会的変化について、学習したと思うが、低下することが多かったと思う。では、高齢者は若者に比べ劣っているということになるか。年を取るということは、悪いことばかりだろうか。」と問題提起を行った。学生からは「自分たちの知らないことを教えてくれる」「人生の先輩として人として大切なことを伝えてくれる」といった意見が出た。学生Aは「何のために生きているかわからなくなっていると話す患者さんは、自身の役割が喪失している状態であるため、自身の役割を見だしこれまでの人生が良かったと思えるような関わり方が重要だ」と語った。

これらの意見交換から、それでは実際にどのようなレクリエーションを行うとこれらが達成されるのかを話合った。オリエンテーションの際、看護部長から、実習病院のある地域の特産品はじゃがいもで、でんぷんだんごが有名であることや、受け持ち患者達の「死ぬまでこの町で暮らしたい」といった発言から、患者はこの地域に愛着があると考え、でんぷんがきを作ってみてはどうかという案が出された。単に患者にでんぷんがきを作ってもらい皆で食べるだけではなく、作る過程で患者から学生に作り方や

昔はどのように作ったかなどを聞きながら作業を進めていくことで、昔の楽しかったことを振り返ったり、若者に教えるといった役割を持ったりすることが出来る。特に女性は家事役割があったこともあり、今までの役割を活かした活動ができることが話し合われた。

### 3) 患者を知りたいと思った場面【実習5～9日目】

学生Bは、患者の以前の生活について注目するようになり、「洗濯しなきゃ」「タイヤは交換してあるから」などの、認知症や幻視による一見意味不明な患者の言動がある一方、来客者と話している様子を見て、家事や仕事の話についてはしっかり受け答えが出来ることを発見しており、患者さんにとって、家事が自分の役割であり、家事をすることで家族を支えてきたのではないかと考えた。患者さんの入院前の生活が大切であり、患者さんにとっての大切な生活を維持していくためには、同じような生活習慣で生活していくことが望まれる。と一日を振り返っていた。

翌日のカンファレンスでは、「患者は食事の際、幻視などがあり食事が進まない。意識を食事に向けて欲しいと思う」と発言し、他学生から「幻視は思入れがあることを示しているのではないか」「一緒の世界に入ってみては。昔の大切にしていることなどが表れている気がする」との助言を受け、学生Bは食事がうまいかないことよりも、過去の背景も踏まえ、患者が見えているものをもっと見ていこうと思った。と受け止めていた。

学生Cは1日の振り返りで、患者との会話の中で、「もう死にたい」と言われ、「私はもっとお話を聞かせてほしいです。昔の話、聞かせて下さい。」と言うと患者は笑顔で「そうかい」と答え、患者は昔の話を沢山してくれた。また、患者との関わりを通して、「自分自身が患者さんの人生観を理解していきたい。」と記載していた。

### 4) 患者の生活史を大切にしたいレクリエーションの実施・結果【実習10～13日目】

学生達は、事前にでんぷんがき作りの練習を行ったが、そもそもでんぷんがきを見たことも食べたこともなかったため、できたものがこれでいいのかからなかった、と話した。ある学生は「先生、患者さんに、昼からでんぷんがき作りをするのですが、私たちは上手に出来ないで、〇〇さん、作り方教

えてもらえませんか。という、いいよ。と笑顔が見られました。」と話す学生もいた(教員のメモより)。

でんぷんがき作りでは、学生が受け持った患者全員が参加した。患者を食堂に集め、ポットにお湯を用意し、器や箸、片栗粉などを準備した。味付けは砂糖と黒蜜を用意し、選択できるように配慮した。女性の患者は「懐かしいね。」と目を細め、患者同士で思い出を語り合う場面も見られた。学生は各々の担当している患者のそばへ行き患者と一緒にでんぷんがき作りを行った。学生が患者に指示をもらいながらでんぷんがきを作ったり、患者が「見ていてごらん。」と手早く片栗粉とお湯を混ぜ、水飴状になるのを披露していた患者もいた。患者Cは学生に「お湯はポットなんかじゃだめだ。寸胴の鍋いっぱいにぐつぐつと煮えくりかえったお湯でないと。」と言う場面も見られたが(教員のメモより)、学生Cの振り返りには、でんぷんがき作りでは、私たち学生が準備していた手順とC氏の手順が違っていったため、最初は困惑してしまっていたが、C氏の手順に従い、実施することで、上手くでんぷんがきを作ることができた。作っている際やレクリエーションの前の段階で、事前に自分で作っており、失敗してしまったことを伝えていたことで、C氏は熱心に教えてくださった。このように最初に自分で作り、上手くいかなかったことを伝えたことで、C氏は自分が教える/伝承する必要があるという役割を見出し、熱心に楽しく参加して下さったと考える。と記載していた。

学生Aは1日の振り返りに、患者さんと本日レクリエーションで行うでんぷんがきについて話していると、とても楽しみにしてくださり、主訴が減少した。「昔、お父さんがでんぷんがきを練っていると、子ども達が周りに集まってね、その時の光景が目には浮かびました。楽しかった。」との発言がみられたことから、患者さんにとって過去の家族との楽しい思い出を思い出し、楽しみを得ることができた。と記載していた。

さらに、(患者は)レクリエーションは、非常に楽しく行なっているようで、「小さい頃はお母さんがでんぷんがきを作ってくれたんだよ。今思い出していた。」と話された。また、「昔は姑にでんぷんがきを食べさせられたけど、今食べたら美味しかったわ!懐かしいねえ。」と話されたことから、昔のことを思い出し、懐かしさを感じながらも、美味しく召し上がって頂けたように感じる。また、「でんぷ

んかきは風邪をひいたときにお粥の代わりに食べるんだ」と話されたことより、若者に知識や記憶、高齢者の思いを伝承するといった役割を果たすことができたと言える。同室の方とでんぷんかきをテーマにコミュニケーションをとることもでき、孤独感を感じることもある入院生活に刺激を与えることができたように思われる。と振り返っていた学生もいた。

実習13日目は学内実習であり、実習での学びを学生同士で共有するために、学内で実習病棟毎に実習で得た学び等を発表することを課している。発表では、レクリエーションについて、(患者達が)でんぷんがきをうまく作ることができたときは誇らしげな表情が浮かべられるなどの反応が見られた。患者は昔を思い出し、その当時の楽しかった様子や家族との思い出、ゆかりあるものを通して人生を振り返り、「良かった、楽しかった、いい人生だった」といった感情を思い出すことができたと考えられる。このことから、老年期の発達課題である統合と絶望に対し、人生を振り返ることで統合に導き出す援助ができたと考えられる。また、若い世代へ昔の食べ物を伝えるという行為は、エリクソンのジェネラティビティ(次世代への伝承)にもあるように、高齢者の役割として価値を見出していると考えられた。と発表があった。

#### 5) 高齢者の生活背景を重要視することが高齢者を尊重することにつながることを理解した場面【実習11・13・14日目】

学生Cは、高齢者は人生の先輩であり、師であることを今回の実習で学ぶことができた。と記載しており、患者から感謝や尊敬する気持ちを持つことの大切さを自分の人生体験からお話して頂いた。私は、その言葉を聞き、再度感謝や尊敬といった気持ちを胸に刻み、(中略)今後も患者の話を聞きたいことを伝えると、時に照れ笑いのような表情を見せた。このような関わりの変容や、ニーズに応じた援助・昔のことを伝えてほしいこと・人生体験からの学びを伝えてほしいことなどを伝えていくことで、少しずつ患者の反応に変化が見られ、実習終盤になると私のことを相棒と呼んでくれるようになり、実習最終日には(中略)握手を交わしながら涙を流してくださいました。今回の体験から、私は患者に合わせた看護を提供する大切さを学ぶことができた。また、その人に合わせた看護を提供するには、身体状況だけではなく、これまでの生活背景やその方の大切に

している思いなどを傾聴し理解したうえで関わっていくことが重要であると学ぶことができた。と実習で得たことをまとめていた。

他の学生も、今回90代後半の患者を受け持たせて頂き、看護学生として多くのことを学ばせていただいたことはもちろん、人生における先輩として多くのことを教えていただいたように思う。長年生きているからこそ大切にしている思いや継続してきた生活習慣があることを知り、病気や入院、障害によって長年培ってきたものが崩れていく苦痛について改めて考える機会となった。このことから、高齢者の看護を行うにあたり、その方が入院している現在だけでなく、過去や入院するに至った経過、退院後の生活、そしてその方が長い人生の中で大切にしてきたものに着目して看護していくことでその方のニーズに応じた個別性ある看護を提供していくことができるのではないかと学ぶことができた。とふりかえていた。

学生Bは最終日に、時代や仕事、生活を知ることがその人を知る上で大切だと思った。仕事を行っていた頃と同じような時間で活動と休息のバランスを取ることができるよう工夫した。患者の生活を大きく変えることなく今までに近い生活を送ることができるよう工夫することは、患者にとって大切なことを守ることや、患者を尊重した関わりにつながるのではないかと考えた。述べていた。

他の学生は高齢者は長年生きてきた分だけ様々な経験があり、思いがあり、強いアイデンティティがある。したがって、長年で培ったものが病気や入院、障害によって大きく変化することの苦痛を考慮し、その方の長い人生の中で大切にしてきた物を守る看護を行うことが重要であると今回の実習にて学ぶことができた。患者が病院にいる間だけをみる看護師ではなく、過去、入院中、退院後などその方の人生を統合して見ていく看護師になりたい。と振り返っていた。

## IX. 考察

### 1) 患者の個別性に気づくための指導

学生Bは患者との関わりに苦慮していたが、患者と接する中で患者の入院前の酪農家としての生活に目を向け、自分が当たり前と思っていた生活パターンが患者のそれとは異なることに気がついた。これは、患者の今までの生活から生じる個別性に気が

ついたと言える。

また、学生Cは、患者主体であることや、患者を尊重した態度というものは、丁寧に説明し、同意を得ることと考えていたと思われる。今まで良いと思っていた丁寧な説明や方法を患者に拒否され、ざっくばらんな教員の態度が通用したことは、今まで画一的な方法では通用しないということだけでなく、学生Cの考えとは異なる考え方に初めて出会った場面であったと考えられる。

鎌田(2000)は、パターン認識や思い込みをやめて、高齢者はどうしてこのような行動をとるのだろうか、と考えることから、高齢者のこころがみえなくてはならない、と述べている。学生達にとってこれらの体験は、自分たちが今まで通用してきた考え方や方法では、目の前的高齢者には通用しないということを実感し、どうしたらこの患者に適した方法を見つけられるのかと考え直すきっかけになったと考えられた。

これらに至るまでの経緯の中で教員は、学生Bに今までの生活に着目すべきことを助言した。学生Cには、患者に拒否された場合、どうしたら上手くいくか意図的にモデルとして学生に関わり方を提示した。藤岡(2000)は、実習のような体験学習について最も大切なことは気づきであり、はっとするような気づきがあってこそ、より深く実感し理解できると述べている。学生が高齢者との関わりに困難感を抱いた時こそ、学生が自分の未熟さに気づかされる機会である。この機会を逃さずに、教員は学生になぜ関わりが困難だったのかを問いかける必要があると考えた。また、教員は学生にとってよい看護師モデルであり、看護ケアの意味づけをする存在(塩川, 2002)であることから、患者とどう関わると良いのかモデルを示すことも必要だと考えた。安酸(2015)は、学生は臨地実習での経験を自分なりに自分の体験に意味づけしていく学習を行っているが、学生一人では貴重な経験が意味付けされずに流れてしまっていることを指摘し、反省的経験を共に出来る教師の教授活動が必要について述べている。患者からの拒否や困難感を実習ならではの貴重な経験であり、なぜ拒否されたのかを検討することが、患者を知るきっかけとなった場面であったため、今後は、学生が患者との関係性に苦慮していないかアンテナを張り、それはなぜかと考えられるように導く必要があると考えた。また、必要時にはモデルを示した後になぜそのような接し方をしたのかの根拠

を共に考えていく必要があると考えた。

## 2) 高齢者を理解するための指導

レクリエーションの企画立案時に、患者の望んでいることや出来ることを共有したことで、高齢者のニーズに応じ、かつ残存機能を活かすレクリエーションの企画に繋がったと考えられる。患者のニーズに応じた援助や残存機能を活かした援助は高齢者の自尊心を保持することにつながる。また、「社会交流の機会が減っている高齢者にとって学生が付き、昔の話をするとはどのような意味を持つか」等の教員の投げかけは、机上の学習を活かす意図があったが、実際に患者と向き合い、高齢者を知った後に、改めて学習した高齢者の理論を提示することで、学生にとって受け持ち患者が理論の具体例となっていたことが考えられる。

事前学習では、高齢者の身体的・心理的・社会的変化について学習するように学生に提示しているが、学生が提出したのものには、高齢者の衰退する機能ばかりが挙がっていた。「高齢者は若者に比べ劣っているのか」と質問した際、3日間高齢者と接してきた中で得た高齢者の素晴らしい側面に気づき、学生自身の言葉でそれらが述べられたことは、高齢者が良き教材となって学生の前に現れたことが考えられる。

エリクソンの「絶望対統合」という概念について、学生から「よくわからない」という声をよく耳にする。しかし、レクリエーションの振り返りにおいて、学生達が、患者は昔を思い出し、(中略)人生を振り返り、「良かった、楽しかった、いい人生だった」といった感情を思い出すことができ、(中略)人生を振り返ることで統合に導き出す援助ができたと考えられる。と述べていることから、本研究の学生達は、目の前的高齢者から多くのことを学び、「絶望対統合」といった概念を自分たちの言葉で語ることができた。今後の実習指導において、実習で学生が高齢者と接する中で体得した「高齢者とは」と、既習の理論を結びつけ、体験を概念化させ、感覚としてだけでなく、知識と結びつけて理解を促していく手助けが必要であることが示唆された。

でんぶんがきは高齢者にとってなじみの深いものであるが、学生のような若い世代では見たことも食べたこともない。高齢者から作り方を教わるだけでなく、どのような時に食べたか、なぜそのような食べ方をしたかなど、それにまつわるエピソードも

教わることで、学生は、戦後の日本の状況と、その中で高齢者たちがどう生き抜いたかを知ることができたと言える。高齢者は、昔の辛かったこと、楽しかったことを思い出し、各々に語り合うことで、長い“時間の蓄積”を経て今の自分が存在していることを学生に示してくれていたと考えた。学生の発表では、でんぶんがき作りを遊びや楽しみとしての側面のみならず、高齢者の生活史を把握し、高齢者の役割やニーズに応じたケアをすることが高齢者の尊厳を保持することに繋がるということが述べられていた。これらのことから、でんぶんがき作りといったレクリエーションを通して、学生は、高齢者の尊厳を大切にしたいケアを提供することができたと言えるであろう。

今回、教員はレクリエーションの企画時にその時々々の助言を行っていただけに過ぎず、深い意図を持ってはいなかった。レクリエーションは高齢者にとっての療養生活上の楽しみであり、残存機能を活かせる機会であると同時に、学生にとっては高齢者の秘められた能力や残存機能についてよく知る機会になる。今井（2012）は高齢者にとって、レクリエーションはQOLを高めていけることも期待されると述べている。さらに、学生にとって、レクリエーションでの体験学習は高齢者理解を深める機会となり、老年看護を学習する有効な方法の一つであると述べている。教員は、この機会を逃さず、学生が高齢者のプラス面に着目し、高齢者のニーズに応じた、QOLが高まるようなレクリエーションが企画できるように支援していかなくてはならないと改めて感じた。

### 3) 高齢者を尊重する態度に導く教授方法

学生Cは、患者から「死にたい」と言われ、「私はいっと〇〇さんからお話を聞かせてほしいです。」と伝えると患者は笑顔で「そうかい」と答え、患者は昔の話を沢山してくれたと述べている。

高齢期は死を目の当たりにしたライフステージであり、肉体的にも社会的にも衰退していく存在である。しかし一方で豊かな人生経験や思慮深さ、寛容、忍耐力なども身につけている（鎌田，2000）。患者との関わりを通して、学生Cは患者の「豊かな人生経験を語る」といった患者のプラス面に着目し、「自分自身が患者さんの人生観を理解していきたい。」という謙虚で貪欲な態度を示した。鎌田（2000）も、高齢者と接するとき、高齢者から謙虚に学ぶ

姿勢をもって相手を尊重し、その話によく耳を傾けることで初めて高齢者のこころにちかづいていくことができる、と述べている。学生Cが謙虚な姿勢を示したことで、数日前まで学生Cに対し拒否的だった患者が、学生Cを受け入れた理由の1つであることが推察される。

学生Bは、一見意味不明な患者の言動から「仕事の話についてはしっかり受け答えができる」ことを発見した。学生C・Bは、患者が「死にたい」と思うような衰退した存在であることや、患者のできないことに着目するのではなく、患者のできることに着目していた。このことから、患者のできることに注目することは自立支援への第1歩であると言える。また、それだけでなく、黒澤（2009）が「自立は人間の尊厳を保持することである。」と述べていることから、患者のできることに注目することは、患者を尊重することにもつながるとも言える。

さらに、学生Bは幻視により食事が進まないことよりも、患者が見えているものを見たいという気持ちを持ち、患者の入院前の生活や役割に着目することに重要性を見出した。これには、学生Cと同様に謙虚に、貪欲に学ぶ姿勢がみられるだけでなく、この方の今までの生活を継続しなくてはならないと考えたことから、学生は、患者を患者としてではなく、一人の生活者として捉えたと言えよう。認知症高齢者へのケアにおいては、認知機能の低下にもかかわらず、かつての自己のアイデンティティの継続によって尊厳は保たれる（認知症ケア用語辞典編集委員会、2016）と言われている。高齢者のできることに着目し、今まで大切にしてきたことを認めることは、高齢者の尊厳を保持することに繋がると考えられる。

黒澤（2009）は人間の尊厳とは人間の自立を内包していると指摘している。レクリエーションの企画立案時に教員は、患者のできることに着目するように指導していたが、この時のみならず、学生が普段の患者との関わりのなかでも「できること」に着目していたことも重要な点と考えられる。学生が高齢者を尊重した態度で看護を実施できるよう、高齢者がどのような状態であろうとも自立した日常生活を営むことを目指すことの重要性を教員が、学生に示していく必要があることが示唆された。



## X. おわりに

学生が高齢者と出会う時、高齢者にも自分と同様の青年期があり、壮年期を経て様々な体験をし、役割や家族を持ち、加齢に伴い身体的衰退のみならず、役割に変化が生じ今に至ることに学生は気がついていない可能性が示唆された。頭では長い“時間の蓄積”のある人だとわかっているにもかかわらず、丁寧な接してはいるものの、個別性を考えずに画一的に接している学生もいることが考えられる。これらのことから、本研究では、高齢者から拒否的な態度をとられる場面や、関わりに困難感を抱く学生もいることが示されていた。学生が困難感に囚われるのではなく、「なぜ拒否されたのか」を共に考え、その方の生活背景や歴史的背景、価値観等を知り、個別性を捉えることで初めて、「高齢者になったその人」と向き合うことができるということが本研究から示唆された。

本研究の結果から、限られた実習期間で効果的な指導を行うためには、既習の知識と、学生が目の前の高齢者から学んだことを結びつけ、体験を知識として体系化できるように、教員がしっかりと意図をもって指導することが重要であると言える。学生のよりよい実践モデルとして、まずは教員である自分自身が高齢者の自尊心を尊重した看護を実践し、身をもって示していく必要があると考えた。

本研究の限界としては、本研究の対象者が7名と少人数であり、実践報告であることから、この結果を用いた一般化が難しいことが考えられる。課題としては、本研究で得た教授方法を実践し、高齢者を尊重する態度を導く教授方法を科学的に検証していく必要があると考えた。

## 謝辞

研究にご協力いただきました実習病院の患者様、指導者をはじめとする職員の皆様に厚くお礼申し上げます。患者様につきましては、療養生活を送りながら、長年培われた貴重な経験や学びを丁寧に学生に伝えていただいたこと、愛情深く学生を受け入れ見守ってくれたことに多大なる感謝を申し上げます。また、日本赤十字北海道看護大学老年看護学 西片久美子教授につきましては、多忙な中ご指導いただきましたことに深く感謝申し上げます。

最後に、研究協力者の皆様に心よりお礼申し上げます。

ます。皆様の学習成果をこのような形でまとめることができたのも、皆様の努力のお陰です。患者に真摯に向き合い、患者の為に今の自分ができることを考え実践できる学生に出会えたことを有り難く思います。そして、教員として皆様から多くのことを学ばせていただいたことに再度感謝申し上げます。

## 引用文献

- 福田峰子, 安藤好枝, 田中和奈, 伊藤紀枝, 梅田奈歩, 粥川早苗 (2011). 老年看護学臨地実習における学生の困難状況と対処行動, 第一報 実習初期における学生の困難状況の実態, 生命健康科学研究紀要, 35, 93-108.
- 藤岡完治, 野村明美 (2000). わかる授業をつくる看護教育技法3 シミュレーション・体験学習, 医学書院. 133-134.
- 今井弥生, 渡辺俊之, 他 (2012). 老年看護学実習におけるレクリエーション実技がもたらす高齢者への効用, 高崎健康福祉大学紀要, 第11号.
- 鎌田ケイ子 (2002). 高齢者ケア論, 高齢者ケア出版. 東京. 64-71.
- 黒澤貞夫 (2009). 介護福祉士養成テキスト1人間の尊厳と自立, 1-27, 建帛社. 東京.
- 認知症ケア用語辞典編集委員会編 (2016). 認知症ケア用語辞典, 197, ワールドプランニング. 東京.
- 佐藤圭子, 広瀬礼子, 他 (2014). 成人看護学実習及び老年看護学実習の実習前後の学修成果に関する学生グループアイデンティティ (その1) 実習前後の自己評価, 日本適応看護倫理研究会学術論文集, 10巻1号, 1-8.
- 塩川華子, 中島五十鈴, 他 (2002). 臨地実習の学びをより促進させる教員の関わり方ー基礎看護学実習I狩猟語のアンケート調査からー, 広島県立保健福祉大学誌人間と科学, 2巻1号, 53-63.
- 竹田恵子 (2010). 看護学からみた高齢者への健康生活の支援ー人生の最終章を生きる高齢者への看護ー, 川崎医療福祉学会誌, 増刊号, 45-55.
- 安酸史子 (2015). 経験型実習教育 看護師をはぐくむ理論と実践. 医学書院. 東京. 6-26.